

ハンドボール競技におけるチーム間差に対する有効な攻撃戦術に関する研究 — 明らかな体格差のみられるゲーム分析から —

A Study on tactics of offense to between teams difference in handball games — Game analysis with a clear physique difference —

山本 忠志* 村上 佳司** 楠本 繁生*** 太田 直希****
YAMAMOTO Tadashi MURAKAMI Keishi KUSUMOTO Shigeki OTA Naoki

本研究は、ハンドボールゲームにおける体格や体力差がある対戦において勝利するための有効な戦術を検討するために、アテネオリンピックでの決勝戦を取りあげ、そのゲーム分析を行った。その結果、攻撃型においては速攻によるスピードを生かした攻撃の出現及び正確性の向上、また遅攻においては、横のずれを作り出すような攻め方として、コート中央からの仕掛けによるサイドへの展開、さらにクロスによるワンツウのパスワークによる攻撃が有効な攻撃戦術として認められた。

キーワード：ハンドボール、攻撃戦術、チーム間差、ゲーム分析

Key words : Handball, offence tactics, between teams difference, game analysis

I. 目的

ハンドボールは決められた時間内に得点を争い、攻守が瞬時に切り替わる、攻防相乱型ボールゲームである。この競技の特徴は、片手で自由に扱える大きさのボールを使用し、垂直にたてられたゴールを目指し、とても得点しやすいゲームである。このことから考えて体格が大きく、力強くボールが投げられる選手はとても優位である。このような選手を集めてくれば勝利することは容易であると考えられる。このようなことから、体格差を克服しなければ体格や体力に劣るチームは絶対に勝利することは不可能となる。

ところで、その差を克服して勝利するための手立てとして戦術や戦略がある（大西1994）。一般的に戦術とは、試合におけるプレーヤーの個人的・集団的行動様式、行為、方策のことで、自己の能力、敵および味方の行動、競技ルールなどによって変化するものであるといわれている（朝岡 2000, 長谷川1990）。集団としての戦術は、相手チームより体力や技術が劣る場合でもゲームを有利に展開させることが出来るという要素を持ち、チーム力に大きく関連するものであると考えられている。すなわち、攻撃と守備の両面において相手を上回る集団戦術行動のとれることが課題となる（後藤ら 2000）。攻撃における戦術課題としては、1. 防御ラインを破る（ノーマーク）、2. 人数的優位をつくる（オーバーナンバー）、3. 空間的優位をつくる（オープンスペース）という三つの課題があり、これらの課題を単独または組み合わせて達成することによりゲームをより有利に展開できるといわ

れている（ケルン 1998）。これまでに水上ら（1989）、長岡ら（1993）、山本ら（2000）は世界トップチームの攻撃に関する攻撃戦術について報告し、戦術の重要性を訴えている。

そこで、本研究では体格差や体力差のあるチームがどのようにしてこの差を克服してゲームを展開し、チームを勝利に導くことができるかを検討するための攻撃戦術を明らかにしようと考え、2004年に開催されたアテネオリンピックの女子決勝戦（韓国対デンマーク）のゲーム分析から攻撃戦術の特徴について比較・検討することによって、体力や体格差があるチーム間差に対する有効な攻撃戦術を見出していくことを目的とする。

II. 方法

1. 対象ゲーム

アテネオリンピックの女子決勝戦の韓国とデンマーク戦をVTR撮影し、対象とした。韓国の平均身長が171cm、体重63.4kgに対してデンマークは平均身長が176cm（体重は公表されていないが明らかに韓国を上回るものである）と体格で明らかにデンマークが優位である。また、デンマークはオリンピック3連覇を目指した大会である。

2. ゲーム分析方法

Sports Code Gamerbreaker（フィットネスアポロ社製）を用いて、対象ゲームに出現したプレー事象を数量化した。

* 兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻行動開発系教育コース

** 天理大学体育学部

*** 大阪体育大学体育学部

**** 奈良女子高校

平成25年4月26日受理

3. 分析項目

1) 攻撃完了率

攻撃回数とシュート数から算出した。ただし、攻撃回数にはリバウンドの獲得による攻撃は含まない。

(シュート数(シュート成功数+シュートミス数) / 攻撃回数×100)

2) シュート成功率

シュート数とシュート成功数から算出した。

(シュート成功数 / シュート数×100)

3) 攻撃成功率

攻撃回数とシュート成功数から算出した。ただし、攻撃回数にはリバウンドの獲得による攻撃は含まない。

(シュート成功数 / 攻撃回数×100)

4) 攻撃型におけるシュート出現率およびシュート成功率

シュートを速攻と遅攻に分類し、それぞれのシュート数と全シュート数からシュート出現率を算出し、それぞれのシュート成功数とそれぞれのシュート数からシュート成功率を算出した。7mスローについては、7mスローに至ったプレーを速攻と遅攻に分類した。

(攻撃型別シュート数 / 全シュート数×100)

(攻撃型別シュート成功数 / 攻撃型別シュート数×100)

5) 地域区分別シュート出現率およびシュート成功率

遅攻でのシュートを地域別のシュート数から地域別シュート出現率を算出し、地域別のシュート成功数からシュート成功率を算出した。

(地域別シュート数 / 遅攻でのシュート数×100)

(地域別シュート成功数 / 地域別シュート数×100)

Ⅲ. 結果と考察

ゲームは前半(14:14)、後半(11:11)の同点で終了し、第1、第2延長も決着がつかず、7mスローコンテストとなり、最終的にデンマークが勝利し、オリンピック3連覇を達成した。ここでの分析は前後半30分のゲームとした。

1. 攻撃完了率およびシュート成功率について

表1は両チームの攻撃完了率およびシュート成功率を示したものである。攻撃完了率では前半はデンマークの方が韓国よりも高く示されたことから、韓国よりもデンマークの方がミスなくシュートにつながられていたことが伺える。ところが、後半は両チームともに70%を超える数値であったことから、ボールをつないでうまくシュートしていたことが伺える。これまでの報告(山本ら2009)にみられるように、両チームともに攻撃においてボールをつなぎうまく展開してシュートまで持ち込むことができていたことが示唆された。一方、シュート成功率では韓国は前半60%みられたていたものが、後半48%まで低下した。一方、デンマークは前後半共に50%程度を維持していた。このことから、韓国は後半シュートの正確性を欠くプレーとなり、シュートミスが多くなったことが伺える。すなわち、後半に体力的な疲れが生じていたことが原因していると考えられる。それでも前後半の両チームともに50%程度であったことは、これまでの報告と同様な数値であった。

2. 攻撃型出現率および攻撃型別シュート成功率

表2は両チームの攻撃型の出現率およびシュート成功率を示したものである。出現率では両チームともに速攻

表1. 両チームの攻撃完了率およびシュート成功率

	攻撃完了率(%)		シュート成功率(%)	
	韓国	デンマーク	韓国	デンマーク
前半	69.7	78.8	60.9	53.8
後半	76.7	73.3	47.8	50.0
トータル	73.0	76.2	54.3	52.1

表2. 両チームの攻撃型出現率およびシュート成功率

		攻撃型出現率(%)		攻撃型別シュート成功率(%)	
		韓国	デンマーク	韓国	デンマーク
前半	速攻型	27.3	24.2	100	50.0
	遅攻型	72.7	75.8	47.1	55.0
後半	速攻型	16.7	16.7	33.3	0
	遅攻型	83.3	83.3	50.0	52.4
トータル	速攻型	22.2	20.6	77.8	42.9
	遅攻型	77.8	79.4	48.6	53.7

表3. 両チームの地域別シュート出現率および成功率

		地域別出現率 (%)		地域別成功率 (%)	
		韓国	デンマーク	韓国	デンマーク
前半	ロング	58.8	75.0	40.0	46.7
	サイド	29.4	15.0	40.0	66.7
	ポスト	11.8	10.0	100	100
後半	ロング	75.0	85.7	33.3	44.4
	サイド	10.0	9.5	100	100
	ポスト	15.0	4.8	100	100
トータル	ロング	67.6	80.5	36.0	45.5
	サイド	18.9	12.2	57.1	80.0
	ポスト	13.5	7.3	100	100

型よりも遅攻型の方が明らかに多くみられ、ほぼ80%近くは遅攻での攻撃であった。両チームとも後半にその傾向は顕著に現れていた。すなわち、無理をせずに大事に1点を取りに行っていたことが伺え、特にその傾向は韓国に認められる。

次に、攻撃型シュート成功率では、韓国は前半の速攻ではすべて成功させることが出来ていたが、後半はその精度は低下し、3本のうち1本しか決まらなくなっていた。デンマークも同様に低下し、後半では速攻による得点がとれなかった。一方、遅攻では両チームともに50%程度であるが、デンマークの方に成功率が高く示された。この結果から、韓国は速攻と遅攻の攻撃でバランスよく得点をしており、デンマークは速攻よりも遅攻での得点が大半を占めていることが伺えるものであった。すなわち、体格や体力差をカバーするための攻撃戦術としては、韓国は防御からの切り替えを早くし、スピードによる速攻の攻撃チャンスを生かしていることが示唆された。このように速攻をいかに得点につなげられるかということが重要であると考えられる。

3. 遅攻での地域別のシュート出現率およびシュート成功率

表3は遅攻における両チームの地域別のシュート出現率とシュート成功率を示したものである。ゲーム分析の結果、遅攻における両チームのシュートはともにロングシュートの出現が最も多く認められた。特にデンマークでの出現率は80%程度と高値であった。

また、遅攻でのロングシュートが占めるその得点率は、デンマークが82.3%であったのに対して、韓国は46.1%と低かった。そのため、韓国ではサイドシュートやポストシュートの出現率が高く示された。すなわち、デンマークは体格や体力を活かしてのロングシュートを上手く得点につなげていることがわかった。一方、韓国はどこからでも得点できるようにコートプレーヤー一人一人がディフェンスとの関係において、役割をきっちりこなして得

点していることが認められた。さらに、遅攻における集団攻撃戦術をみてみると、デンマークは遅攻における全攻撃54回のうち、9m外側でのクロスによる攻撃が23回(42.5%)あったのに対して韓国は、全攻撃49回のうち、クロス攻撃が9回(18.3%)であった。それに比べて、韓国は相手とのずれを作るオープン攻撃が20回(40.8%)と多く認められた。このことから、チームの特性がいかされる攻撃戦術をもちながら、得点機会を狙っていることが示された。このように、それぞれのチームでそれぞれのプレーの特徴を捉えることができたわけである。

そこで、韓国の遅攻での集団攻撃戦術を時間経過とともにみてみると、前半では、コート中央の2対2における攻撃を中心に組み立てていたことが示され、それが起点となって攻撃されることによって、両45度のディフェンスがセンターのカバーをしようとして少しよることによって、攻撃側の左右フローターがアウト側にずれることになり、パスをつなぐことによって、サイドでの2対1ができ、45度フローターのカットインまたはサイドマンにつないでのサイドシュートの攻撃がなされていた。その結果、センタープレーヤー、ポストプレーヤー、両フローター、両サイドとどのポジションからもシュートが決められるチャンスが作り出されているものと考えられる。また、この攻撃は2次、3次的な速攻場面でもみられる攻撃戦術として展開されていた。

また、後半ではコート中央でのクロス攻撃によって、クロスするプレーヤーにディフェンスが引き寄せられて、その裏をつくという、リターンパスによるワンツウの攻撃戦術による攻撃が多くみられた。このことは、攻撃の一連の方向性を変えることにつながり、ディフェンスの迷いを誘うことになったと考えられる。

これらの結果から、体格や体力差に対して、どうしてもロングから攻めることは難しくなるため、ディフェン

スの間をどのように攻めるかという、横のずれをつくるという攻撃戦術が有効であることが示唆された。

ハンドボールの技術と戦術. ベースボールマガジン社：東京.

IV. まとめ

ハンドボールゲームにおける体格や体力差がある対戦において勝利するための有効な戦術を検討するために、アテネオリンピックでの決勝戦（韓国対デンマーク）をとりあげ、そのゲーム分析を行った。その結果、攻撃型においては速攻によるスピードを生かした攻撃の出現及び正確性の向上、また遅攻においては、横のずれを作り出すような攻め方としてコート中央からの仕掛けによるサイドへの展開、さらにクロスによるワンツウのパスワークによる攻撃が有効な攻撃戦術として認められた。

文 献

- 朝岡 正雄（2000）スポーツの「戦術」とは何か. 体育科教育10月号：38-40.
- 後藤幸弘・松本靖（2000）サッカーにおける楽しさと戦術行動に関わる能力との関係—児童の意識調査とゲーム様相の実態から—兵庫教育大学研究紀要, 第21巻：41-52
- 長谷川 裕（1990）戦略・戦術指導の内容と展開—体育科教育におけるスポーツ戦略・戦術の指導（2）—. 体育科教育10月号：60-64.
- 石井 喜八（1978）ハンドボールの競技特性. 体育の科学：795-780.
- ヤーン・ケルン：朝岡 正雄ほか訳（1998）スポーツの戦術入門. 大修館書店：東京.
- 水上 一ほか（1989）ハンドボールの世界トップチームにおける攻撃戦術に関する一考察. 筑波大学体育科学系運動学類運動学研究第5巻：81-88.
- 長岡 雅美・土井秀和（1993）ハンドボールにおけるゲーム分析—第10回女子世界選手権大会を事例として—. 大阪教育大学紀要 42巻：73-82.
- 中川 昭（1995）球技における作戦と指導. 学校体育4月号：66-69.
- （財）日本ハンドボール協会（1996）ハンドボール指導教本〈新訂版〉. 大修館書店：東京.
- 大西 武三（1994）ボールゲームの戦術—ハンドボールを例にして—. 体育の科学44（7）：502-506.
- 山本 忠志ほか（2000）ハンドボールにおけるゲーム分析からみた有効な攻撃戦術について—ボールマンとノーボールマンとの関連性—. 日本体育学会第51回大会号：427.
- 山本 忠志ほか（2009）ハンドボールにおけるゲーム分析からみた有効な攻撃戦術について—世界選手権大会を対象に—. 兵庫教育大学研究紀要：第34巻151-155.
- ヨアン・クンスト＝ゲルマネスク：中村 一夫訳（1981）